［実践報告］

「シティズンシップ（現代社会と市民）」の授業実践

― 現代社会における〝子ども〟とのよりよい共生の視点から ―

天野美和子*

Abstract

This paper is a report on the class practice of “CONCEPT OF CITIZENSHIP (SOCIETY AND CITIZENS)”. In this class, we would like to provide an opportunity for students to learn about the problems that exist in modern society when we, adults, think from the perspective of respecting the human rights of children, who are in a socially vulnerable position, and coexisting with them. We would like to provide an opportunity for students to learn what kind of problems exist in today's society from the viewpoint of respecting the human rights of “children” and living together in harmony with them. They will then come up with ideas on how they can contribute to solving these problems. In the final session of this class, each group prepared and presented a presentation on the discussions among the students in their group work.

1　はじめに

本稿は、2023年度秋学期に実施した発展教養科目「シティズンシップ（現代社会と市民）」の授業実践報告である。本授業は、「学生に社会の構成員であるという自覚を促し、社会に関わろうとする自発的な意識を醸成する」ことを方針とする本学独自の取組みである。なかでも「シティズンシップ（現代社会と市民）」の授業においては、「現代社会では多様な属性の人、様々な状況の人が共に暮らしていることを知り、関心を持つことや、そこで生じている様々な問題・課題の存在に気づくこと、自分自身も当事者の一人であるという視点を持つこと等を目的として」取り組んでいる（池谷・田島・二ノ宮・高梨，2022）。この目的を踏まえて、本学の様々な学部・学科所属の教員が各々の専門分野の視点を活かして、学生一人一人が市民としての教養につながる授業を展開している。

筆者は、児童教育学部児童教育学科の教員であり、子ども学・保育学を専門としており、将来、保育士や幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生を養成している。よって、本授業を担当するにあたり、子ども学・保育学の視点を取り入れた授業を展開した。

＊　東海大学児童教育学部

2　授業実践

本授業は、2023年度秋学期前半（2023年９月25日～11月13日）開講の全７回の授業であり、筆者は２クラスの授業を担当した。一つは、３つの異なる学科の学生計60名が履修するクラス（以下、Xクラスとする）、もう一つは、５つの異なる学科の学生計69名が履修するクラス（以下、Yクラスとする）であった。

（1）授業の計画

本授業の実施スケジュールは表１のとおりである。

表１　授業スケジュール

授業回	主題・位置づけ
第１回	ガイダンス シティズンシップについて考える　①市民とは何か
第２回	シティズンシップについて考える　②社会課題の具体像と市民の力
第３回	（１）気づく：現代社会における子どもを取り巻く状況について
第４回	（２）調べる：現代社会における子どもを取り巻く状況にはどのような問題が存在しているか？
第５回	（３）深める：現代社会における子どもを取り巻く状況に存在する問題の解決のための構想
第６回	（４）伝える（発表）：現代社会における子どもを取り巻く状況に存在する問題解決のための構想 ※前半グループのプレゼンテーションの実施（PowerPoint で作成した資料を使って発表する）
第７回	※後半グループのプレゼンテーションの実施（PowerPoint で作成した資料を使って発表する） 授業のまとめとふり返り

第１回、第２回授業において、発展教養科目「シティズンシップ（現代社会と市民）」の全クラスに共通する基本的な知識、すなわち、用語の意味やシティズンシップという概念についての説明、シティズンシップについての現在の議論の展開等について講義した。それらを踏まえて、授業課題において学生自身に「市民」とは何か、自分自身は「市民（社会の担い手）」だと思うかどうか、その理由はどのようなことか等について個人ワークで考える機会を設け、個人ワークで作成した課題を持ち寄り学生同士で共有し合った。この課題である「自分自身は市民（社会の担い手）であると思うかどうか」という問いに対して、学生の多くは「市民（社会の担い手）であると思う」と回答し、その理由としては、「選挙権があるから」「税金を払っ

ているから」「アルバイトやボランティアなどで少なからず社会に貢献しているから」「物を購入して経済を回すことに貢献しているから」というような回答が語られた。一方、わずかではあるが「市民（社会の担い手）であると思わない」と回答する学生も見られ、その理由としては、「まだ学生の身分であり、それほど社会に貢献しているとは思えないから」「将来の社会の担い手であるかもしれないが、現時点では、社会の担い手とまでは言えない気がする」などの回答が見られた。また、履修生の中には留学生も複数名おり、「留学生は、日本において市民と考えてよいのだろうか」という回答も見られた。以上のように、様々な角度からの意見を学生同士で共有することにより、「他の学生の意見を知ることで、自分の考えが及ばなかったことに気づくことができた」という学生の振り返りも声も聴くことができた。

（2）グループワークでの取組みについて

表１のスケジュールで示したとおり、第３回から第７回授業は、学生のグループワークが主な内容となった。この計５回のグループワークのクラス共通のテーマとして「現代社会において〝子ども〟とのよりよい共生のために求められることは何か？」という問いを掲げて、グループで議論を展開してもらった。なお、グループでの成果の発表は、第６回と第７回授業で実施した。

第３回授業の冒頭では、これからグループワークを進めるにあたり、筆者の専門である子ども学・保育学の視点から、子どもの人権と現代における子どもを取り巻く社会的背景および問題について講義した。その内容のポイントとしては、「子どもは、身体的・精神的な側面からも、その発達は未熟であり、大人の適切な養育や保護が必要不可欠な存在であること」、「子どもは、泣いたり、騒いだり、走り回ったりして周囲に〝迷惑〟をかけることも多いかもしれないが、そもそも誰もがこのような子ども期を経て、周囲に受け入れてもらいながら大人になっているということ」、「子どもは、生きていくうえで大人に頼り、支えられるばかりの存在であるように感じられるかもしれないが、たとえ生まれたばかりの赤ちゃんであっても、一人の尊い命であり、人間であり、そこには人格が備わっている。したがって、その人権が尊重されなければならないこと」等であった。

上記を踏まえてクラス共通のテーマである「現代社会において〝子ども〟とのよりよい共生のために求められることは何か？」について各グループで話し合ってもらい、最終的にはグループとして深めたい具体的な研究タイトルを設定してもらうのだが、クラス共通のテーマがやや大きく抽象的でもあるため、学生が、より具体的に現代の子どもを取り巻く社会的背景をイメージしやすいように、図１、図２で示したスライドを用いて、人的環境・物的環境の側面からの説明を加えた。

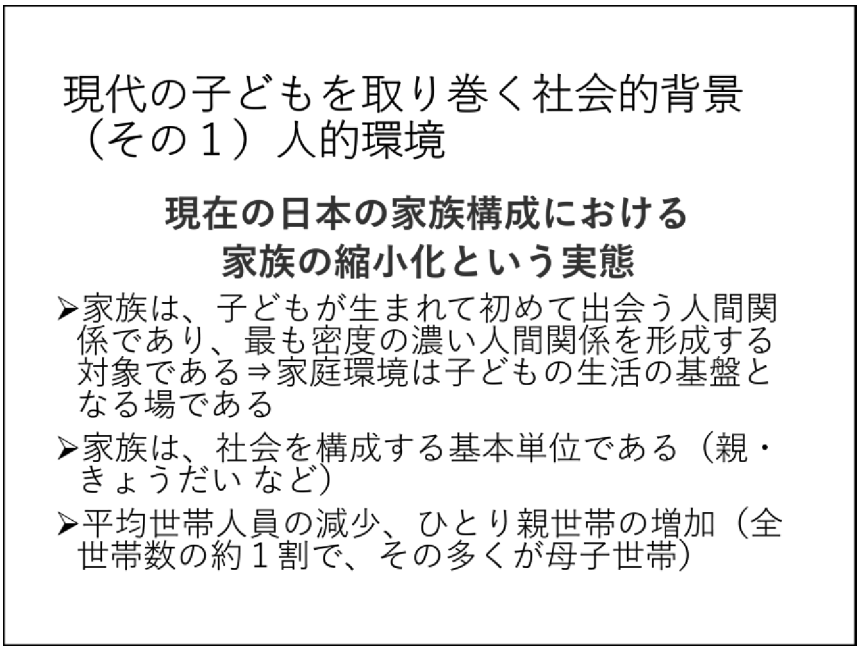

図１　第３回授業冒頭の講義で用いたスライド資料（その１）

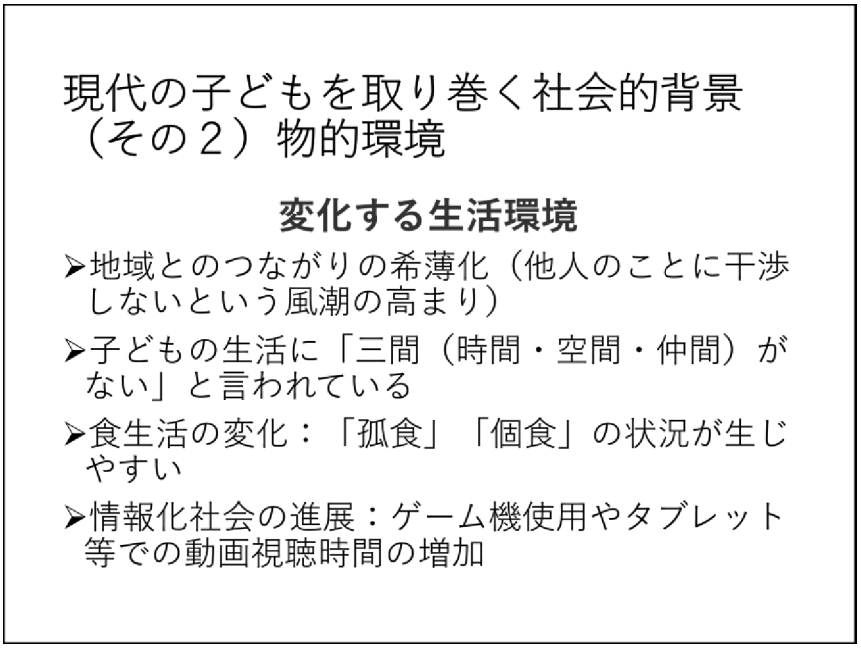

図２　第３回授業冒頭の講義で用いたスライド資料（その２）

以上の講義を踏まえたうえで、現代社会において、私たち大人が「子ども」という存在との共生という視点で考えると、現代社会にはどのような問題が存在し、その問題に対して例えば行政ではどのような取り組みがなされているのか、さらに、未だに残されている課題はどのようなことなのかについてグループで調べ、それを基に議論を展開し、自分たちならば、その解決のためにどのように関わることができるのについて深めてもらった。最終的には、この一連のグループワークでの議論を通して、各グループで一つのプレゼンテーション資料としてまとめて発表してもらった。

3　グループワークの成果

Xクラス、Yクラスのいずれも、グルーピングは担当教員である筆者が行った。いずれのクラスも複数の異なる学科の学生が集っていることを活かし、できるだけ学科を越えた交流ができるように配慮して、1グループ4～5名ずつの少人数でのグルーピングを行った。また、グループワークを実施する際に合理的配慮を必要とする学生に対しては、グループメンバーがどのような協力をすればよいかについても適宜助言した。たとえば、聴覚に障害がある学生とのグループワークにおいては、必要に応じてノートテイカーにもグループに同席してもらいサポートを受けつつも、出来るだけグループメンバー同士で協力してLINEなどのチャット機能を活用する等の方法でグループでの話し合いを行うことを提案した。また、日本語の理解が困難な留学生とのグループワークにおいては、翻訳アプリ等のICTを積極的に活用することを提案し、グループの学生らが互いにコミュニケーションがとれるように助言した。

グループワークを実施する上で、今回のグループワークでは、初対面の学生と共に一つのテーマについて取り組むことが求められるため、グループメンバー同士の協働が重要になることを伝え、グルーピング直後には、自己紹介とともに、自分たちのグループにおいて大切にしたい協働とは何かについてウォーミングアップの課題として提示し話し合ってもらい、それをグループ内で共有したうえで本題のグループワークに取り組んでもらった（図3）。



図3　「ウォーミングアップのグループワーク」のテーマを示したスライド

以上のように、「現代社会における〝子ども〟とのよりよい共生について」というクラス全体としての共通の大きなテーマから、各グループで、そこに繋がる具体的な研究タイトルを見出すための話し合いにスムーズに移行できるように、まずはグループメンバー同士の自己紹介を通して互いを知り合うことから初めて、徐々に抽象的な問いについて話し合う体験をしたうえで、本題のグループワークへと段階的に進められるように工夫した。最終的に、第６回授業と第７回授業において各グループが発表した研究タイトルは以下のとおりである。

〈X クラスの研究タイトル〉

・「子どもの貧困」
・「ネグレクトをなくすには」
・「ヤングケアラーと真の問題」
・「インクルーシブ教育」
・「子どもと地域のふれあいの機会を増やす：子どもの将来のためのコミュニケーションの場」
・「子どものコミュニケーションとスマホの普及」
・「子ども間の差別について：スポーツで差別はなくせるのか」
・「日本の学生の虐待問題について」
・「家庭における心理的虐待」
・「子どもの孤立化と外遊び」
・「不登校の原因と虐待の関わりについて」
・「子ども同士の繋がり」

〈Y クラスの研究タイトル〉

・「子どもの居場所の在り方」
・「不登校の背後に潜む挑戦と解決策：大学生の私たちに出来ること」
・「小学生のゲームのしすぎ問題」
・「小学生スマホいらなくね？」
・「親と共に暮らせない子供達を支える児童養護施設について」
・「子どもの表現力を伸ばすために何ができるのか」
・「貧困が生む教育格差」
・「インターネットによる児童への影響」
・「中高生以下のデジタル化に対する問題と取り組み」
・「なぜ不登校が増えているのか」
・「子供の運動不足について」
・「小学生のスマホやゲーム依存」
・「子供の孤立を防ぐ第三の居場所」
・「子供が外で遊ばない悪影響」

4　まとめの考察

「３グループワークの成果」で示したＸクラス、Ｙクラスの各グループの研究タイトルからも分かるように、「現代社会における〝子ども〟とのよりよい共生について」というクラス全体としての共通の大きなテーマからグループで議論を展開した結果、筆者が専門としている子ども学・保育学の専門分野においても問題解決に向けて極めて緊急性も高く重要とされている問題にも着目できている点が印象的であった。また、本授業の履修学生が自らの身近な問題意識と合わせながら、日頃耳にしているニュースや、グループワークにおいて改めて情報を検索し辿り着いた統計データ等を用いて、対象となる問題に対して、どのような取り組みがなされているのかについてグループで調べて活発なディスカッションが展開する様子が見られた。プレゼンテーションの際には、自分たちのグループの発表に加えて、他グループの発表に対して質疑応答の時間を設けたこともあり、グループメンバー内だけでは気づくことができなかった指摘をし合ったり、アイデアを提供する様子も見られた。

本授業を振り返って、グループワークにおいて学生にとってやや難しかったのではないかと感じた点としては、研究タイトルがデリケートな問題（例えば、虐待や不登校等）を取り扱っている場合において、学生である今現在の立場で、その解決に向けて具体的にどのように関わればよいのかという点で頭を悩ませていた様子も見られた点であった。おそらく、学生らが自分たちだけの力で、問題となっている事柄に直接的に何かの関わりや働きかけをしなければならないのではないかという発想が、難しさを招いた要因となっていたのではないかと考えた。この際の学生への助言としては、知識や経験値から考えても、現在の学生らの立場で出来ることには限界があるということをまずは自覚しておくこと、そして、自分たちの現状で現実問題としてどこまでが可能で、どこからが不可能なのかを考え、それを踏まえたうえで、すでに支援のために活動をしている NPO 法人などの団体に協力したり、行政の窓口や本学のその分野に造詣が深い教員らに力を借りるための声をあげる等により、何らかのアクションに繋げることが出来るかもしれないということを伝えた。学生が現時点において、自身が社会を担う市民であるかどうかについて模索している状況において、社会における特に複雑でデリケートな問題に対しては、机上の空論に留まることなく、現実的に学生が自分ごとに引き寄せて考えるためには、上記で述べたような知識や経験値のある人々と繋がり、協力して取り組む必要があることを授業の中で伝えることが必要であると考えた。今後の授業実践の課題としたい。

引用文献

池谷美衣子・田島祥・二ノ宮リム さち・高梨宏子（2022）．2022年度～カリキュラム 発展教養４科目の概要・授業運営について ver.2022.12.19，1-2.